

ひとまずなる

ひとまずなるパソコン通信とインターネット覗きを、私も六月から始めた。目的は大袈裟に言えば情報収集ということになるけれども、実をいうと一開業医が仕事の上で広く内外に探索しなければならぬ、緊急かつ逸すべからざる情報などそんなにあるわけではない。また旧来の情報源が腐朽して役立たずになっているわけでもない。

生涯学習の必要を傍から喧しくいわれなくなつて、遅れていると自分で認めたくないから、勉強は好きだ(と思つている)けれど(なんか屈折してますね)多額の費用と時間をかけてやたら新しいものに飛びついたがるのはどうしてだろう。仕事に関しての情報源はまだ圧倒的に活字メディアなのに、何かに煽られてあせつているのかもしれない。

O・157騒ぎの際に、国立予防衛生研究所や東京都立衛生研究所の解説がインターネット上で読めるという 情報 を私が出たのは、朝日新聞夕刊の科学ジャーナリストのエッセイからだつた。しかもその時は県衛生部―県医師会―市医師会のルートで到来したファックスによる通達を既に見ていた。このファックスも今までは時に医師会員の葬式次第の通知を吐き出すのが関の山で、伝染病に関する中味のある 情報 そのものが乗つて来た通達は初めてであつた。

数人の専門家を除いてはそれまで誰も知らなかつたO・157感染症が岡山県邑久町に続いて堺市で大発生し、これがどこでも誰でも罹る危険があつてしかも死亡率が高い病気であるという事実はマスコミの盛大な報道が無かつたら、これほど迅速に世間に知られることはなかつたであろうし、このようなルートでの緊急ファックス通信も無かつたと思う。作られてはいたが生きてはいなかつた情報ルートのひとつが、ここで開通したことになるが、そうさせたのは情報自身の圧力、時代の要請というべきであろう。

情報の受け手として見渡してみれば、既に身边は定期不定期の印刷物やらテープ、ビデオその他こちらの処理能力を超えて流れ込んでくる情報の洪水である。医療関係に限ってみてもちよつとサボるとすぐに文献雑誌の山が出来る。取り寄せてみた学会講演のテープも聴き返すことはまずないし、漫然と切り抜いた新聞記事があとで役に立つことは稀である。一読を要する筈の専門誌は手に取つたら直ちに読まないと置いたら最後、ツン読誌の中に沈殿して半年後には空しく塵紙交換に直行という具合で、多彩かつ過量の情報とあまりうまく付き合つている気がしないまま流されている。

しかも精神衛生上よろしくないのは、こうして棄てている、あるいは取り逃がしている情報が実は有益なものではなかつたのかといつも疑わざるを得ないことで、それが困る。真に有益な情報などそんなにありはしないとは思つけれど。

それなのにこの上なんでインターネットなのか。とりあえずはアソビである。まず仕事の上で役立たい気は大いにあるけれど、何をどうするという手順はこれから勉強しなくてはならないのがちょっと煩わしい。

会員七十人程の小さな学会とパソコンで繋がり、メールが往来するようになったのが唯一それらしい成果で、あとは趣味の領域、自分のコレクションを増やそうという実益の為に、同好の士を捜すのに使っている。もともと少数派なのでパソコンがなければ絶対に遭遇することのなかった筈の連中がポツリと見つかる。皮肉なことに仕事を続ける元気を養う上で、このアソビ道具が必要不可欠なものになりそうである。

(五時通信 第二五〇号 一九九六年八月十日)